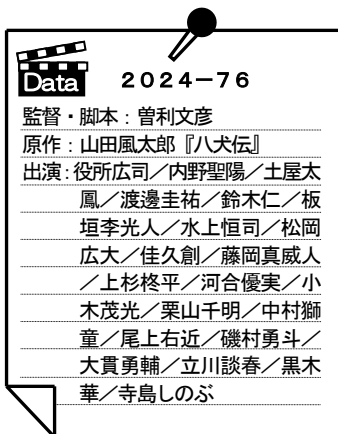




## みどころ

私はNHKの連続人形劇『新八犬伝』を観ていないし、山田風太郎原作の『八犬伝 上・下』も読んでいない。しかし、滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』は小学生の時に読んだし、映画『里見八犬伝』(83年)も楽しく鑑賞した。

滝沢馬琴と葛飾北斎は、江戸時代の文化文政の時代に開花した町人文化を代表する二大スターだが、その2人がこれほどの同志的つながりの中で、『八犬伝』の創作に励んでいたことにビックリ！おじさん同士が何度も互いに褒め合う関係には少し違和感があるが、【実】のパートとしての2人の友情と信頼、そして滝沢一家の家族愛の姿はじっくり確認したい。他方、【虚】のパートたる八犬士の活躍ぶりは、ファンタスティックなエンタメ巨編として頭の中をカラッポにして楽しみたい。

もっとも、アメリカの大統領選の結果が見えてきた11月7日の今、勧善懲悪の世界や「正義は勝つ」の哲学がどこまで信じられるかは、あなた次第だ。

## ■□■あった、あった！NHKの人形劇！曾利監督が夢中に！■□■

私の小学生時代は、戦後復興をいち早く成し遂げた日本が、テレビ界において素晴らしい活動を開始しはじめた時期だ。1959年の皇太子殿下と美智子さまの御成婚と1964年の東京オリンピックの開催によって、それまで「高嶺の花」だったテレビが急速に家庭の中に普及した。それと共に始まったさまざまな人気番組が、『てなもんや三度笠』、『シャボン玉ホリデー』等であり、連続人形劇の『ひょっこりひょうたん島』だった。1949年生まれの私は、1960年頃の中学生時代に私の家にも入ってきたテレビで、上記の番組や『ロッテ歌のアルバム』等のごく限定されたテレビ番組を楽しみに見始めた。NHKの朝ドラや大河ドラマもその一つだった。

時は移り、私が司法修習を終わり弁護士生活に突入した頃の1973年4月から1975年3月まで、NHK連続人形劇で放映されたのが『新八犬伝』だったが、もちろん私はそれをほとんど観ていない。しかし、子供時代にこれに夢になっていた曽利監督は、いつかそれを映画化したいと願っていたらしい。そして、山田風太郎の原作『八犬伝 上・下』を読んで、その思いを一層強くし、本企画が実現に至ったようだ。

私は、山田風太郎の『八犬伝 上・下』は読んでいないが、中学時代には彼のヒット作たる『甲賀忍法帖』や『魔界転生』を、さらに人気シリーズになった『くの一忍法帖』シリーズを夢中になって読んでいた。彼の小説は、何と言っても、奇想天外なストーリー展開とさまざまな美女や悪女が登場するエロチックな展開がウリだったから、男ばかりの中高一貫教育を強いられていた男子生徒にとって彼の作品はかなり刺激的なものだった。

『八犬伝 上・下』は、1982年8月から朝日新聞夕刊に全359回にわたって連載されたものが、1983年に書籍化されたものだ。他方、滝沢馬琴『南総里見八犬伝』の小説は小学生時代に読んだ本で知っていたし、私の大好きな真田広之が薬師丸ひろ子と共演した、映画『里見八犬伝』(83年)はメチャ面白かったから、本作も必見！

## ■□■滝沢馬琴（役所）と葛飾北斎（内野）が登場！■□■

中高時代の日本史の受験勉強の中で私は、江戸時代に花開いた文化の一つとして“戯作”を知り、その一つとして『八犬伝』を書いた、戯作者（小説家）滝沢馬琴を知った。小学生の時(1959年)の家族揃っての“大阪旅行”で初めて観て大興奮した宝塚歌劇の演題『椿説弓張月』も、彼の代表作だ。

他方、滝沢馬琴以上に有名な絵描きが葛飾北斎。90年の生涯で3万点以上の作品を描いた彼が、世界で一番有名な日本人アーティストであることは、『HOKUSAI』(20年) (『シネマ49』164頁)を観れば明らかだ。彼の物語はNHKのTVドラマ『眩(くらら)〜北斎の娘〜』(娘の葛飾応為も画家)でも描かれていたが、浮世絵、歌舞伎、遊郭などの町人文化が花開いた文化文政の時代の江戸は、歌麿、写楽、北斎らが一世を風靡した素晴らしい時代だった。そのことを私は味気ない歴史教科書で学んだが、あの当時、この『HOKUSAI』が公開されていれば、これ一本を鑑賞するだけで十分だったはずだ。なお、写楽については、映画『写楽』(95年)があるので、これも対比して観れば本作の理解がより深まるはずだ。

## ■□■【虚】のパートと【実】のパートが交錯！その成否は？■□■

人間に表と裏があるように、すべての戦いには【虚】と【実】がある。“天下分け目の合戦”と言われている「関ヶ原の戦い」(1600年)や宮本武蔵vs佐々木小次郎の「巖流島の決闘」(1612年)も、【虚】と【実】の視点から分析すれば面白い構図が見えてくるはずだ。しかして、文学(小説)の中にその【虚】のパートと【実】のパートを交錯させて描いたのが山田風太郎の原作『八犬伝 上・下』だ。山田風太郎『八犬伝 上・下』における【虚】のパートは、圧倒的スケールで描く八犬伝、対する【実】のパートは物語を生み出した馬

琴の感動の実話だ。

子供の頃に NHK 連続人形劇『八犬伝』に夢中になったという曾利監督は、今や人気映像作家としての地位を確立させているが、山田風太郎『八犬伝 上・下』における、作者の滝沢馬琴を登場させる【実】のパートと彼が描く「八犬伝」の【虚】のパートをシンクロさせるという斬新なアプローチに驚き、その映像化を熱望したい。本作のパンフレットには PRODUCTION NOTE 『八犬伝』完成までの道』があり、そこでは曾利監督が山田風太郎の原作『八犬伝』と出会い、それを映像化させるまでの道のりが解説されているので、これは必読だ。なお、曾利監督は山田風太郎『八犬伝』の斬新なアプローチに驚いただけでなく、そこに描かれた馬琴の生き方や考え方は、今を生きる人々にも響くに違いないと確信したそうだが、それは一体なぜ？役所広司は今や日本を代表する俳優としてどんな役でも完璧にこなしているが、本作の【実】のパート＝滝沢馬琴の物語を生み出した、馬琴の感動の実話ではどんな戯作者の姿、そして頑固親父の姿を見せてくれるのだろうか？そして、その成否は？それが楽しみだ。他方、圧倒的スケールで描く「八犬伝」の世界、【虚】のパートでは、どんな八犬士がどんな活躍を？

## ■□■八犬士が持つ八つの珠と八つの文字は？■□■

不思議なことに、将棋界でも囲碁界でも、数十年に一度、天才が現れている。将棋界においては、現在の藤井聡太七冠やそれに先立つ羽生善治、谷川浩司、中原誠、大山康晴等がそれだ。囲碁界も同じで、かつての呉清源や直近の井山裕太七冠がそれだが、現在は 2024 年 10 月に名人位を奪取した一力遼四冠、井山三冠、2 年ぶりに無冠となった芝野虎丸の 3 人による三者鼎立時代に入っている。しかして、あなたは、囲碁界における七冠や将棋界における八冠の名前を知ってる？それが、囲碁界では棋聖・名人・本因坊・王座・天元・碁聖・十段の七冠、将棋界では竜王、名人、叡王、王位、王座、棋王、王将、棋聖の八冠だと知っている人なら、きっと『八犬伝』における八犬士の名前と八犬士がそれぞれ持つ八つの珠とその底に浮かび上がる八つの文字も知っているはずだ。その八つの文字は、仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌だが、その意味は？また、里見家にかけられた呪いを解くため、八つの珠を持つ八人の犬士たちは如何に集結し、如何にして壮絶な戦いに挑んだのかも知っているはずだ。

## ■□■2 人の天才、馬琴と北斎の友情と信頼はなぜ？どこから？■□■

2024 年 1 月 26 日の誕生日をもって 75 歳となり、後期高齢者となった私は、さすがに若い俳優たちへの興味を失ってきた。そのため、八犬伝のキューマンとなる伏姫を演じた土屋太鳳や、八犬士のリーダー格となる大塚信乃を演じた渡邊圭祐くらいは知っているものの、他の若手俳優たちはほとんど知らない。そのため、本作の【虚】のパートたる八犬伝の奇想天外なストーリーは、あくまでファンタジーとして楽しめばよい、と割り切ることができた。

それに対して、【実】のパートとなる、馬琴 vs 北斎のベテラン俳優同士の語らいは、役

所広司と内野聖陽の演技力に注目しながら、丁々発止のぶつかり合いをしっかりと確認したい。『八犬伝』のような奇想天外かつファンタジーなストーリーを生み出す滝沢馬琴が、あんなに「堅物」で、融通のきかない男だったのは意外だが、それを嘆いてばかりいる妻のお百（寺島しのぶ）の演技や、ありえないほどのいい息子である宗伯（磯村勇斗）の嫁、お路（黒木華）の演技はさすがだから、本作では“滝沢一家”の家族模様が見事に表現されている。ほとんど外に出ないで書斎の中にこもっている馬琴と、自由人で年がら年中、旅から旅を続けている北斎の2人が、なぜ気が合ったのか、そして北斎がなぜ定期的に馬琴の家を訪れていたのかは、本作を見ればよくわかるので、それに注目！2人のおじさん同士が、狭い部屋の中に長い間閉じこもり、話ばかりしている姿は、お百が言うようにかなり変な風景だし、そこで互いに褒め合う風景もかなり違和感がある。しかし何度そんなシーンを見ていると、この2人が互いに互いを尊敬し合っているのは本心だとわかるから、こんな2人のオヤジ同士の友情と才能の認め合いは興味深い。目が悪くなってもなお、「八犬伝」完成への創作意欲が衰えない馬琴を支え、“口述筆記”を始めたのは、それまでひらがなしか書けず、漢字を全く知らなかったお路だが、その努力の姿にビックリ。私の映画評論は22年間に及び、『シネマールム』の出版は56巻を数えたが、常にパソコン打ち要員に苦勞している私にとって、お路のような存在は羨ましい限りだ。

【虚】のパートはあくまでファンタジーとして楽しみつつ、【実】のパートは名優の熱演に拍手しながら、人間同士の心のつながりの中に表現されている友情や家族愛の姿をしっかりと確認したい。

## ■□■こだわりは正義が勝つ！『八犬伝』は勸善懲惡の世界！■□■

私が小学生時代に見た中村錦之助、東千代之介らの東映時代劇は、すべてが勸善懲惡の世界で、どんなに苦勞しても最後には「正義が勝つ」ことが大前提だった。しかし、現在も泥沼化が続くウクライナ戦争や、宗教問題を内包したハマス vs イスラエル紛争や中東問題全般を考えれば、「何が正義で何が不正義か」は全くわからなくなっている。私の小学生時代に一世を風靡した漫画が『月光仮面』だったが、その主題歌は「月光仮面のおじさんは、正義の味方よ、良い人よ。」と高らかに歌われ、そのことに何の疑問もなかった。しかし今や、長い間“世界の憲兵”と言われてきたアメリカが、「正義の味方」だと信じる人は激減しているはずだ。

そんな時代の今、江戸時代の町人文化が花開いた文化文政の時代を生きた滝沢馬琴の口から、『八犬伝』の物語は勸善懲惡の物語であり、「最後には必ず正義が勝つ」ことにトコトンこだわっていることが強調されることにビックリ！【虚】のパートたる八犬伝の物語では、里見家の当主である義実が、隣領館山の安西景連に攻められ、落城が目前に迫ったところで、飼い犬の八房に「景連の首を取ってきたら娘の伏姫を与える」と“戯れの言葉”を発したところ、これを真に受けた八房が、景連の首を口にくわえて戻ってくるストーリーが描かれる。これを見ただけで、『八犬伝』は「そんなバカな！」というファンタジー小

説であることがよくわかるが、約束の履行を求める八房の強い意志を知った伏姫が、「君主が言葉を翻すことの不可」を説き、八房とともに里見領を離れていくところから、壮大にして奇想天外なストーリーが展開していくから、さあお立ち会い。**【虚】**のパートは当然、**【実】**のパートより面白いから、それをじっくり楽しみたい。また、それとともに様々な紆余曲折を経て、最後には「正義が勝つ」に至るストーリー展開もしっかり確認したい。

しかし、滝沢馬琴が勧善懲悪の世界に、そしてまた「正義が勝つ」という結論に最後までこだわったのは、一体なぜ？私は今この原稿を、11月5日（アメリカ時間）に投票されたアメリカ大統領選挙の開票速報が流れる中で書いているが、今やトランプが正義なのか、それともハリスが正義なのかは全くわからず、アメリカ国民は完全に二分されてしまっている。滝沢馬琴のように、死ぬまで「正義が勝つ」ことを信じ、そんな思想で『八犬伝』を書き続けたことは私の目には驚異だが、本作の**【実】**のパートでは、そんな馬琴の年老いてますます盛んな迫力と徹底して「正義が勝つ」にこだわる生きざまをしっかり確認したい。

2024（令和6）年11月7日記